

ジョナサン・スウィフトと医師たち

橋 沼 克 美

ジョナサン・スウィフトの時代(一六六七—一七四五)のイギリスの医学は旧態然としていて、内科・外科ともに医療の進歩に資するところが少なかったといわれる。しかしながら、この「医学の停滞の時代」にみるべき点がないわけではない。第一に、医療従事者の組織の発達である。イギリスには十六世紀前半以来王立ロンドン医師会(The Royal College of Physicians of London)(以下RCP)と床屋外科医組合(The United Company of Barbers and Surgeons)という二つの組織が存在し、それぞれ内科と外科の医療および医師の任免を司っていた。十七世紀には医師会に付属する組織として薬店主組合が認可され、十八世紀半ばには外科医が床屋外科医組合から分離した。王立外科医師会

が組織として成立したのは、スコットランドでは一七七八年、アイルランドでは一七八四年、イギリスでは一八〇〇年である。⁽¹⁾このように、スウィフトの時代が医療の専門化・分業化が進行しつつある時代であったことが、制度史からもわかる。第二に、博愛主義的気運の高まりと関連した病院設立のブームである。一七〇〇年の時点での病院の数は、ロンドンで三つ、ダブリンで一つに過ぎなかったのが、世紀の半ばまでにそれぞれ九つと八つに増えている。⁽²⁾新設された病院の多くが個人の発案と寄付による私設病院(voluntary hospital)である点が目につくが、スウィフトはダブリンにおけるこのような動きの推進者のひとりであった。第三点として、本職の医業に劣らず他の分野—政治・文学・科学・博物学など—

でも活躍した医師たちが多いことが、この時代の特徴として挙げられる。哲学者ジョン・ロックがその最たる例であるが、一般的知名度においては劣るにしても、この時代の医者たちは人材が豊富である。

以上の点を念頭に置きながらスウィフトの生涯をみると、冷徹な知性をもった厭世的風刺家という既成のイメージは少なからず変更を余儀なくされるであろう。また、科学革命から商業革命そして産業革命へと移行しつつあったとされるこの時代の一味違う側面も垣間見えてくるであろう。

メニエル症候群

スウィフトが、宿痾ともいふべき目まいと難聴に悩まされ続けたことはよく知られている。現存するスウィフトの書簡の中にみられるこの病気の言及は、彼が四一歳のとき（一七〇八／九年）のものだが、最初にこの病気に襲われたのはずっと若い頃で、一六八九／九〇年、スウィフトが二二歳の頃である。⁽⁴⁾ 書簡集には二つの症状に関する記述が夥しいが、最初の発症から三十八年を経た後に、目まいの原因がリンパ (golden pippin)

の食べ過ぎだったとスウィフトが述べているのは興味深い。彼にとってこの出来事は、一生重くのしかかった持病の起源として忘れることのできないものであり、心理的イメージとしては、イヴの原罪と大食というキリスト教の七大罪のひとつを思い起こさせる。ところで、スウィフトの作品が初めて活字になったのは、一六九〇年の『アテネ協会に捧げるオード』であるから、彼の作家としての経歴と病歴とは、出発点において奇しくもほぼ一致することになる。

スウィフトは目まいと難聴を、それぞれ異なる原因によるものと思っていたが、後世のスウィフト研究によって、この病気は「メニエル症候群」とよばれる内耳の疾患であることがわかっていく。⁽⁵⁾ メニエル症候群は、十九世紀のフランスの耳科医 (Prosper Ménière) (一七九九—一八六二) の名に因んでいる。目まいと難聴の二つの症状が、単一の原因によるという考えは、スウィフトの時代にもなかったわけではないが、患者スウィフトには認めることのできないものであった。スウィフトは、一七三三年、友人への手紙の中でこういっている。「ここ「アイルランド」の医者たちは私の二つの病気の原因

にはつながりがあると思っている。だが、いつもそうとは限らないんだ。というのは、一方がなくなっても、もう片方が残ることがよくあるの⁽⁶⁾。メニエル症候群の原因論が確立されたのが十九世紀半ばであることを考えるならば、スウィフトが医者⁽⁶⁾の意見を信用しなかったとしても無理はないであろう。

スウィフトと医師たち

ロンドン時代(一七〇〇—一七二三)

『ステラへの書簡』(一七二〇—一七二三)を書いた頃のスウィフトは、トリー党のパンフレット作家として、また、匿名で出版された傑作諷刺『桶物語』(一七〇四)の作者として、既にロンドンの文壇・社交界では有名人であった。トリー党の領袖ロバート・ハリーと親しかったし、宮廷にも出入りしていたから、ロンドンの著名な医師たちに接する機会も増した。基本的に、この時期のスウィフトはトリー・サークルを中心に交流しており、このことは医師たちとの交流にも反映されている。一七二〇年九月二九日付のステラへの手紙の中でスウィフトは記している。「私の耳に関するどんな婦人の助言

も二ペンスの意味もたないが、君にしたがってコバーン医師を訪ねようと思う。ラドクリフは知らないし、バーナードには会ったことがない」⁽⁷⁾。

ウィリアム・コバーン⁽⁸⁾(William Cockburn)(一六六九—一七三九)は後述するアーバスノットと同じく、スウィフトがロンドンに滞在した際によく訪ねたスコットランド人の医師である。准男爵の次男に生まれ、エディンバラ大学で修士号を取得した後、ライデン大学で医学博士号を得る。RCPの認定を受けた後海軍軍医を勤める。当時水兵がよくかかった赤痢の特効薬の発明によって富と名声を得た。開業医としても成功した。晩年にはグリニッチ病院院長となった。

ジョン・ラドクリフ(John Radcliffe)(一六五〇—一七二四)はロンドンで最も高名かつ裕福な医師だった。ウェイクフィールド生れで、オクスフォード大学で医学博士号を取りフェローとなったが、ロンドンに出て開業医として成功し、財産を築いた。ウィリアム三世の侍医を勤めたほか、アン女王の医師でもあった。機知に富んだ会話の名手だったので人気があったが、同じ医者仲間のアーバスノットや詩人アレクサンダー・ポープには風

刺作品の中で揶揄されている。儲けの強い医者というのは当時も今も悪い医者のひとつの典型だが、ラドクリフも世間からはそのようにみられていた。彼は薬店主たちと結託して、患者を診もしないで処方箋を書いていたという説がある。これが本当だったとすると、ラドクリフはRCPの方針に反した不正な医療行為をしていたことになり、風刺家たちの憤りには正当な根拠があったといえる。事の真偽は定かではないが、施薬院プロジェクト(後述)にラドクリフが反対していたことは確かで、彼にとって不利な状況証拠といえるかも知れない。

スウィフトは結局、ステラの助言にしたがってラドクリフに診てもらい、また、彼が処方した薬を飲んだが、医師としてのラドクリフに対しては特に苦言を呈してもないが、かといって、彼の医術を高く評価しているわけでもない。スウィフトにとってラドクリフは、特にハーリーの暗殺未遂事件との関連で記憶に残っていたようである。スウィフトによれば、ハーリーは「胸部中央、剣状軟骨(*cartilago ensiformis*)の上約四分の一インチのところ」をペンナイフで刺された。命に別状はなかったが、療養中に担当外科医をラドクリフの「気紛れ」

のせいで、自分のお抱えの外科医に代えられたので、ちゃんと世話してもらっていないのではないかと、スウィフトは心配している。⁽¹⁰⁾

医師としてのラドクリフは、理論よりも経験を重ねるタイプといわれ、この点では十七世紀後半のオクスフォード学派の流れを汲むものと思われる。因みにこの一派は、『脳解剖』(一六六四・英訳一六八四)などの著作で有名なトマス・ウィリスを中心とし、門下生にはトマス・シドナム、リチャード・ロウアー、ジョン・ロックなど錚々たるメンバーがいた。⁽¹¹⁾ラドクリフはトリー党の国会議員を勤めたこともあるが、生涯独身で、莫大な財産は遺言によって母校と英国の医療のために役立てられた。彼の遺産の主なものとしては、オクスフォード大学のユニヴァーシティ・カレッジの医学フェロー職、彼の名を冠した同大学に今も残る病院・図書館・天文台、それにロンドンの聖バーソロミュー病院の増築などが挙げられる。

チャールズ・バーナード⁽¹²⁾(Charles Bernard)(一六五〇―一七二〇)はクロイドン出身の外科医である。ヘンリー・ブーンの徒弟として修業した後、床屋外科医組

合に加入し、監察官後に会長となる。アン女王の宮廷外科医も勤めた。『国民伝記事典』(DNB)によると、バーナードはスウィフトの友人だったとあるが、どのような根拠に基づくのかは明らかでない。彼は不必要な手術をしない良心的かつ優秀な外科医としてだけでなく、博学な収書家としても知られていた。スウィフトはバーナードの死後に開かれた蔵書のオークションに何度か出かけて本を買っている。新旧学問論争においてはスウィフトの敵側の陣営のひとりだったウィリアム・ウットンも、『大英博覧で有名なロンドンの外科医』⁽¹³⁾バーナードに、近代の医学に関して教えを乞うたと記している。兄フランシスはジェームズ二世の侍医のひとりであり、語学に秀で、チャールズ同様立派な蔵書を持っていた。

ロンドン時代のみならず、スウィフトが最も親しく付き合った友人のひとりがジョン・アーバスノット⁽¹⁴⁾(John Arbuthnot)(一六六七—一七三五)である。スウィフトは概してスコットランド人が嫌いだったが、前述のコバーンとアーバスノットのふたりのスコットランド出身の医師たちは例外であった。アーバスノットはキンカーディン州アーバスノット生れで、アバディーンの

マーシャル・カレッジに学んだ後上京し、学のある反物商ウィリアム・ペイトのもとに寄宿しながら、数学の家庭教師などをしていた。その後オクスフォード大学にも学んだが、医学博士号を取得したのはセント・アンドルーズ大学である。

アーバスノットの知的関心は広く、古代ローマのコインやメダル、サイコロ・ゲームやトランプに関連した確率論、食餌および気候と健康に関する学問的著作のほか、風刺家としての彼の名を決定づけた『ジョン・ブル物語』(一七二二)と呼ばれる一連のトーリー党支持のパンフレット、そして、ポーブとの共作風刺『マータイナス・スクリプリーラス物語』(一七四一)を書いた。アーバスノットは一七〇四年に王立協会、一七一〇年にはRCPの会員となる。RCPでは一七二七年に名誉あるハーヴェー講演の演者を勤めた。

アーバスノットは温厚な人柄でユーモアに富み、彼の機知はその名手スウィフトでさえも一目置いたほどであった。また彼は、知的なユーモリストという点でうまが合う親友であり、スウィフトが最も信頼する医師でもあった。『術には通じているが商売は知らない』⁽¹⁵⁾とスウィ

フトがある詩の中でアーバスノットを描写しているが、これはスウィフトにとって医師に対する最大の賛辞である。人間嫌いスウィフトという一般に知られているイメージは、少なからず風刺家と私人との混同から生じているが、そのような誤解はアーバスノットへの書簡を読めば解けるといっても過言ではない。「世の中にアーバスノットのような人間が十人もいたならば、この旅行記『ガリウァー旅行記』なんか焼き捨てるのに⁽¹⁶⁾」というスウィフトのことは、苛烈な諷刺家の内面を吐露するものとして記憶に留めたい。

スウィフトが会食する仲であったサミュエル・ガース(Samuel Garth)(一六六一—一七一九)はホイッグの医師である。善良な人柄と詩才によって知られるが、それでもなければ、トリー政府に通じていたスウィフトのお眼鏡には叶わなかっただろう。ガースはヨークシャー生れで、ケンブリッジのピーターハウス・カレッジで医学博士号を取った。当時ヨーロッパの臨床医学では屈指のライデン大学とオクスフォードのオール・ソウルズに学んでいる。RCP会員になった後、陸軍軍医として働き、陸軍大将モルバラ公の侍医を勤めた。ジョージ

一世の即位時には陸軍軍医総監に任命された。

ガースの文名を決定づけたのは『施薬院⁽¹⁷⁾』(The Dispensary)(一六九九)という擬英雄詩だった。この詩は一七四一年までに十の版を数えるほどよく読まれたが、当時の多くの風刺詩同様、時事的言及に満ちているため、今日まで普遍的な文学的評価を保っているとはいいがたい。しかしながら、医療史との関連でいえば記憶に留めるべき作品である。詩の背景となっているのは、薬を買う経済的余裕のない貧しい人々のための施薬機関の設立を巡るRCPの内紛である。

RCPは十六世紀以来医師の資格審査、医療行為の監督、薬品の品質管理を統括してきたが、これより百年遅れてできた薬店主組合は、薬の製造と販売の特権として認められてはいたが、機構的にはRCPに従属していた。一六七五年、RCPは貧民を無償で診療し彼らに対して最低の価格で薬を与える案を可決したのだが、そのためには薬店主組合の了解が必要だった。この案は一六八七年に再度確認されたが、このときは薬店主組合の抵抗にあった。薬店主は医師の処方にしたがって患者に薬を売るのが原則だったが、この原則が必ずしも守られていた

わけではなかった。たとえば、緊急を要するような患者の場合、処方箋が必要な医師が捕まらないことが往々にしてあったので、薬店主は自分の判断で、以前に経験した似たような症状に対する処方方を流用するということがあった。これは実質的には医師の業務の代行であり、それによって不当に利益を得ていた薬店主が少なくなかったといわれる。

一六九九年、薬店主組合の協力が得られなかったRCP側は、施薬院プランの賛同者たちが銘々十ポンドを拠出して基金を設けるという新たな合意に達した。しかしながら、RCP内部にこの案に対する根強い反対論があった。反対派は、新案が医師会と薬店主組合の対立を決定的にし、何よりも患者を紹介してくれる薬店主たちを敵に回すことによって商売に支障を来すのではないかと主張した。ガースが『施薬院』を書いたのは、反対派の医師たちを「面白おかしく揶揄する」(tally) ことによって義務感に目覚めさせることであった。

スウィフトの『桶物語』と『書物戦争』(一七〇四)は、新旧論争の風刺による調停という構図と、後者における擬英雄詩的スタイルの採用という点でガースに倣う

ところが大きいといわれる。

ロンドン時代にスウィフトが親しくした医師としてもうひとりジョン・フレンド⁽¹⁸⁾ (John Freind) (一六七五—一七二八) が挙げられる。フレンドはノーサンプトン州の牧師の家に生まれ、ウェストミンスター校からオクスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジに進学した。彼が在籍した当時のクライスト・チャーチには、新旧論争の中のひとつのエピソードであるファリス論争において、ケンブリッジの古典学者リチャード・ベントリーに対抗して古代派を擁護した一派がいた。スウィフトは神学博士号をオクスフォードで取っているが、その際にこの一派と交流があった。フレンドの指導教官のひとり、後にジャコバイト陰謀事件(一七二三年)で連座することになるロチェスター主教フランシス・アタベリーであった。大学を出た後、フレンドは従軍医師としてピータバラ侯やオーモンド公の大陸遠征に同行し、スペイン、イタリア、フランドル地方などに赴いた。フレンドは王立協会およびRCPの会員、アイルランド陸軍軍医総監のほか、国会議員も勤めた。主著『医学史』(一七二五年)はアタベリー事件でロンドン塔に幽閉さ

れた間に書かれ、長い間その分野の古典として高い評価を得た。兄のロバートはウェストミンスター校の校長になった人物だが、スウィフトと同年で親しかった。

スウィフトと交流はなかったが著名なロンドンの医師たちを何人か挙げておく。

リチャード・ミード (Richard Mead) (一六七三—一七五四)

アン女王とジョージ一世の宮廷侍医。ラドクリフの死後、ロンドンの上流階級の間で最も人気のある医師となる。ユトレヒト、ライデン、パドヴァなどの大学で医学や古典学を学んだ。当代一の古典学者ベントリーや前述のフレンドと親しかった。王立協会・RCP会員。顔が広く、党派を問わずに彼のコネが頼られたが、スウィフトも一度ミードに頼ったことがある。友人バーバー夫人の子が医者を目指したとき、スウィフトはミードに仲介を頼み、そのお礼にダブリン版スウィフト全集(一七三七—一七四一)を献呈している。⁽¹⁹⁾ このときスウィフトが世話したコンスタンティン・バーバーは、後にアイルランド医師会の薬学・本草学教授および会長になった。⁽²⁰⁾

サー・ハンス・スロウン (Sir Hans Sloane) (一六六

〇—一七五三)

アイルランドのダウン州生れ。バリ、モンペリエで医学を学び、オランジュ、オクスフォード両大学で医博。

王立協会・RCP会員。王立協会を中心とした英国の科学者たちと広く交流した。ほかの科学者たちと違うのは、英領ジャマイカに総督付きの医師として赴任したことがあり、彼の地から博物学的知識と大量の標本を持ち帰ったことである。開業医として得た莫大な財産は、彼の蔵書と様々な標本の収集を増大させたが、これらは後に遺言によって国家に寄付され、大英博物館創設の基になった。

ジョン・パートリッジ⁽²¹⁾ (John Partridge) (一六四四—一七一五)

テンブルの地元リッチモンド生れ。靴職人に弟子入りした後独学でヘブライ語を含む古典語を学ぶ。ライデンで医学博士号を取り、チャールズ二世、ウィリアム三世の宮廷医となる。怪しげな予言を含んだ暦書 (almanac) の著者として知られる。スウィフトは「ビカースタッフ・ペーパーズ」とよばれる一連のパンフレットによって、パートリッジの予言のいかさまぶりを徹底的に

攻撃した。

サー・リチャード・ブラックマー (Sir Richard Blackmore) (一六五四—一七二九)

オクスフォードとバドヴァに学び、ウィリアム三世とアン女王の侍医となった。十七・十八世紀にはサー・トマス・ブラウンやジョン・ロックのように、本業以上に他の分野で活躍した文人医師が数多いが、ブラックマーはそのタイプのいわば劣等種である。退屈な長編英雄詩と文芸批評で知られるが、『桶物語』などにおいて再三スウィフトの嘲笑の的となった。

ダブリン時代(一七一四—一七四五)

スウィフトの時代のダブリンは、医学・医療の面で著しい発展をみた。医学についていえば、ダブリン大学トリニティ・カレッジ(以下TCD)に医学校が設置され(一七二一年)、自然科学・解剖学・植物学・化学の講師および医学教授の職が創設された。⁽²²⁾ 医療組織としては、王立アイルランド医師会(The Royal College of Physicians of Ireland)(以下RCPI)がスウィフトが生まれた一六六七年にチャールズ二世の特許状を得て誕生し

た。ダブリンには聖メアリ・マグダリン組合と呼ばれる床屋外科医組合が十五世紀半ばから存在していた。十七世紀末迄にこの団体に薬店主と髪作り職人が加わった。RCPIはこの国で二番目の医療従事者の団体であり、初代会長ジョン・スターン⁽²³⁾(John Sterne)(一六二四—一六六九)がクロムウェル政権時に組織した医師友愛会が、王政復古後に国王の認可を得たものである。RCPI創設時の会員の中にはダウン・サーヴェイと呼ばれるアイルランドで最初の正確な土地測量の責任者として、また、『アイルランドの政治的解剖』(一六七二)などの著作で知られるサー・ウィリアム・ペティ⁽²⁴⁾(Sir William Petty)(一六二三—一六八七)もいた。ペティは本来オクスフォードで医博を取った医師であり、クロムウェル軍の軍医として初めてアイルランドに赴いたが、数学と実務の才能にも長けていたため、アイルランドの土地再配分政策の責任者として起用された。

スターンの死後、RCPIを支えた人物のひとりにはサー・パトリック・ダン⁽²⁵⁾(Sir Patrick Dun)(一六四二—一七二二)である。アバディーン出身で、マーシャル・カレッジの学寮長を家系にもつ。アイルランドの地には

軍医総監として初めて赴任し、名譽革命時にはウィリアム三世率いる陸軍の軍医総監に任命され、死ぬまでこの職を勤めた。RCP Iの会長を数度勤め、また、ダブリンの上流階級の間で最も信頼される開業医として成功を収めた。彼の遺志によりRCP Iにダブリン市欽定医学教授職が設けられ、また、彼の名を冠した病院が作られた。

スウィフトの時代のダブリンにおいて最も著名な医師といえばサー・トマス・モリノー⁽²⁶⁾(Sir Thomas Molyn-eux)(一六六一—一七三三)である。アイルランド政府の役人の家系に生まれ、TCDを卒業後大陸に渡り、ライデン大学で医学を学んだが、このときジョン・ロックと知り合い生涯の友人となる。その後ロンドン、オクスフォード、ケンブリッジで当時の主だった科学者たちと交流し、再びダブリンに戻って医博を取得しRCP I会員となる。TCD医学教授、数度にわたってのRCP I会長、軍医総監を兼任した。モリノーの知的関心は広く、『王立協会科学年報』に医学のほか、動物学・植物学・地質学・考古学・古典学などに関する記事を寄稿している。兄のウィリアムはトマスに劣らぬ才人で、王立

協会を通じて活躍した人だが、アイルランド史においては、スウィフトも『ドレイビエ書簡』(一七二四—五)の中で言及しているこの国の自治権を訴えた『アイルランドの国情』(一六九八)の著者として知られている。モリノーはダブリンで最も裕福な開業医でもあった。

スウィフトとダブリンの病院

ヘンリー八世による修道院解体以後、プロテスタント政権下のアイルランドには、軍人のための療養施設王立キルメイナム病院を除いて、十八世紀初めまで病院は存在しなかった。この不便を解消しようとする動きは十七世紀末頃から本格化し、一七一八年に、ブリテン諸島で最初の私設病院である慈善養護院(Charitable Infirmary)が開設された。以後の五〇年間に開設されたダブリンの病院は七つあるが、そのうちの三つにスウィフトは管理委員として関わっていた。⁽²⁷⁾

一七一四年にスウィフトはロンドンの王立ベツレヘム病院、通称ベドラムの管理委員になったことがあるが、⁽²⁸⁾ダブリンの諸病院の設立に本格的な形で関わるようになったのは、一七二一年にステイヴンズ病院の設立委員

会に加わってからのことである。通常、病院の設立には議会の承認と、アイルランド国政およびダブリン市政における要人たちと医師たちから成る設立委員会が必要となるが、スウィフトは聖パトリック大聖堂主任司祭として、初めは公的な形で諸病院の設立・運営に関わったものと思われる。

ステイーヴンズ病院は、リチャード・ステイーヴンズ(Richard Stevens)(一六五四—一七一〇)という医者者の遺志によるもので、彼は全財産一万二千ポンドを設立のための基金として遺した。アイルランドで二番目の私設病院としてステイーヴンズの病院が開設したのは、一七三三年、彼の死から二十三年後であった。一七三八年に死んだスウィフトの生涯の友人ステラ(エスター・ジョンソン)は、この病院付きの牧師を雇うための基金として千ポンドを寄付する旨を遺言にしたためた。そうする(30)ように勧めたのはスウィフトだともいわれている。これに関して興味深いのは、万が一アイルランドがプロテスタンティズムを国教としなくなった場合は、ステラの基金を廃止するという条項をスウィフトが加えたいらしいことである。現実には、アイルランド国教会はステラの

死から百四十年後、グラッドストーン内閣のときに廃止された。これと同時にステイーヴンズ病院の牧師職も廃止されたが、ステラの善意は彼女の名を冠した病棟の設置という形で以後も保たれた。しかしながら、ステイーヴンズ病院は建物の老朽化と予算の問題のために一九八七年に閉鎖され、現在その建物は厚生省の役所として使用されている。

ステイーヴンズ病院の設立に最も尽力したのは、スウィフトとステラの旧友トマス・プロウビー(31)(Thomas Proby)(一六六五—一七三〇)であった。プロウビーはアイルランドきっての外科医で、一六九九年にこの国の陸軍外科医長に任命されたが、彼の医学教育についての詳細は不明である。プロウビーは二十代前半ですでにその腕前が知られていた。『王立協会科学年報』一六九九年の巻には、彼が行なった女性の膀胱からの象牙の櫛の摘出という風変わりな手術に関する記事が掲載された。この記事はアイルランド出身者が外科学に関して発表したものとしては最初である。ちょうどこの頃ダブリンを訪れたロンドンの書籍商で著述家のジョン・ダントン(John Dunton)は、その『ダブリン見聞録』(The

Dublin Scuffe) (二六九九) のなかでプロウビーに言及している。⁽³²⁾ ダントンはトリニティ・カレッジの図書館を見学した際、そこに陳列されていた罪人の解剖標本などの珍しいものとともに、プロウビー医師を目にした。ダントンの案内者によれば、プロウビーは胆石手術の名人で、その外科手術の手並みと貧しい人々に対する奉仕によって知られる医師であったという。プロウビーは軍外科医長職を死ぬまでの三十年間にわたって勤めたが、彼の後任となったのは娘婿のジョン・ニコルズ⁽³³⁾ (John Nicols) (生年不詳—一七六七) であった。ニコルズはスウィフトの臨終に立ち会った医師のひとりである。アイルランドでスウィフトが最も親しく付き合った医師はリチャード・ヘルシャム⁽³⁴⁾ (Richard Helsham) (一六八二頃—一七三八) である。ヘルシャムは生まれ故郷にある、当時アイルランド随一のグラマースクールであったキルケニー校およびTCDの卒業生で、そのいずれにおいてもスウィフトの後輩であった。TCDでは数学講師、自然哲学教授、医学教授を歴任し、また、RCPI会長に二度選出された。ステイーヴンズ病院の設立と運営にも深く関わった。ヘルシャムは、アーバスノット

のように博識でユーモアがあって陽気な性格の人物であった。ヘルシャムの人物像についてスウィフトは、親友ポウプへの書簡の中で次のように描写している。

ここに才知があり氣立てもいい医者がいる。れっきとしたジュントルマンで優れた学者だし、楽に暮らせるだけの財産もある。誰に対しても親切で、友人も多く彼らをよく招いては豪華なもてなしをする。八人から十二人もの友人たちと、ふんだんな上等の肉とワインでもって夕べはランプに興じる。「中略」彼は誰も怒らせたりしないし、誰とでも気軽に付き合える。これこそ本当に幸せな男ではないかい。「中略」こういう性格になれるなら財産の半分を抛ってもいいが、それでもやはり自分の好みではない。⁽³⁵⁾

スウィフトにとって、ヘルシャムは第二のアーバスノットになるには物足りなかったのかも知れないが、主治医として、また、友人として信頼していたことは確かである。スウィフトは医学に興味があって、関係書をいくつか集めたが、その一部をヘルシャムに贈呈している。⁽³⁶⁾

聖パトリック病院⁽³⁷⁾

スウィフト自身が最も力を入れたのは、狂人病院の建設であった。アイルランドには狂人専用の収容施設は当時まだ無かった。一七〇〇年頃から狂人病院設立の計画が持ち上がったのはいたが、難航していた。この当時、狂人たちは通常監獄に入れられ、治療法としては、下剤・鞭打ち・放血・冷水浴などが用いられていた。特にアイルランドでは、患者の顔だけを出して、地中に三日三晩埋めておくということも行われていたという。⁽³⁸⁾ ダブリン貧民院には、一七〇八年に狂人たちのための独房が作られたが、一七二九年以降、この施設は捨て子専用になっていた。その背景には、離婚や遺産相続の問題解決のために、この施設が悪用されたということも絡んでいた。夫や妻、そして、遺産相続権の保有者が、狂人と「称して」施設に送り込まれるケースが後を絶たなかったもので、施設の収容能力はまもなく限界に達してしまっていたのである。このような不都合を避けるために、貧民院は狂人の収容を一切止めてしまった。以上の経緯については、元ダブリン市長として当事者のひとりでもあったウィリアム・ファウンズ(William Fownes)が一七三二年にス

ウィフトに宛てた手紙の中で記している。⁽³⁹⁾ スウィフトが狂人病院の設立に本腰を入れたのは、この頃であったと思われる。

スウィフトは財産のほとんどを狂人病院の設立のために使う覚悟であった。⁽⁴⁰⁾ スウィフトの計画は、ステイーヴンズ病院やマースー病院のような、篤志家の手で作られた病院をモデルにしていた。前述のファウンズの手紙は、病院設置の計画についてスウィフトが意見を求めたのに答えて書かれたものである。ファウンズは、寄付金の集め方、運営のための人員構成と予算、建物の構造などの点について、具体的な意見を述べている。スウィフトの計画が遺言として最終的な形を取るまでには、ほぼ十年を要した。この間、用地の取得の問題は、特にスウィフトを悩ませた。スウィフトは、狂人病院を聖パトリック教会の隣接地に建てたかったのだが、手に入りそうな土地はことごとく地主たちによって先に買われてしまう。後に彼の遺言執行人のひとりとなるダブリン市裁判所長イートン・スタナード(Eaton Stannard)への手紙の中で、スウィフトは「この付近の田舎地主たちは、売れそうな土地をいつも、死骸を見るカラスのように眺めて

(41) いる」と述べている。スウィフトの陳情によって、一七三五年には病院のための用地がダブリン市から与えられた。⁽⁴²⁾ それにもかかわらず、計画は挫折したかにみえる。というのは、二年後の一七三七年になっても、依然として用地が決まっていなかったからである。スウィフトは今度は、ステイーヴンズ病院の管理委員たちに援助をあたっている。この際、ヘルシャムが仲介を務めたが、翌年の彼の死によって、計画は再び変更をみることになった。⁽⁴³⁾

紆余曲折を経て、聖パトリック病院がブリテン諸島最初の私設精神病院として開設されたのは、スウィフトの死後の一七五六年であった。この病院は通称「スウィフトの病院」として、ダブリン市の西部、ギネス・ビール工場および旧ステイーヴンズ病院に隣接する場所で現在でも運営されており、中にはスウィフト縁りの遺品などが陳列されている。同時代にダブリンに創設された病院で現在でも維持されているのは、スウィフトの病院とこれより十年ほど早く開設された産科院ロタンダ病院のみである。

スウィフトは遺言の中で、医師を志すいとこの息子に、その教育費として百ポンドを遺し、また、医学関係の蔵

書を遺贈した。この親戚はジョン・ホワイトウエイ⁽⁴⁴⁾ (John Whiteway) (一七三三—一七九八) といひ、スウィフトの検死解剖を行ったほか、アイルランド外科医師会の第二代会長となり、また、スウィフト病院の訪問外科医を四十年間にわたって勤めた。⁽⁴⁵⁾ 精神病院建設の動機は不明だが、スウィフトの医療への関心は後世に確実に引き継がれたといつてよい。

(1) J. D. H. Widdess, *A History of the Royal College of Physicians of Ireland 1654-1963* (Edinburgh: E & S Livingstone, 1963), p. 119.

(2) ロンドンには聖バーンロシャー、聖トマス、ベッレハムの各病院が修道院の解体以前から存在していた。十八世紀前半に創設されたものはウェストミンスター (一七一九)、ガイ (一七二五)、聖ジョージ (一七二三)、ロンドン (一七四〇)、ミドルセックス (一七四五)、聖ルーク (一七五一) である。Ben Weinreb and Christopher Hibbert, eds., *The London Encyclopaedia* (London: Macmillan, 1983) "Medicine in London" および各病院の項参照。タニエル・デフォーもロンドン案内の中でこれらの病院に触れている。P. N. Furbank, W. R. Owens and A. J. Coulson, eds., *Daniel Defoe: A Tour through the Whole Island of Britain* (London: Yale UP, 1991),

pp. 162-4.

十八世紀前半にダニリンに作られた病院は慈善養護院

(一七七一) 孤児病院 (一七三〇) 'メスチャーメンズ' (一七三三) 'マースー' (一七三四) '不治の病人のためのもの' (一七四四) 'ロタンタ産科病院' (一七四五) 'ロック' (一七五五) 'スウィフト' (一七五十六) である。John Fleetwood, *History of Medicine in Ireland* (Dublin: Browne and Nolan, 1951), passim; Douglas Bennett, *Encyclopaedia of Dublin* (Dublin: Gill and Macmillan, 1994), s. v.; J. D. H. Widdess, *The Royal College of Surgeons in Ireland and Its Medical School 1784-1966* (Edinburgh: E & S Livingstone, 1967), pp. 117-9.

(c) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, 5 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1963-65), I, 116.

(4) スウィフトはハワード夫人への手紙の中で、最初に田舎に襲われたのが「リッチモンド」で「すなわち」シェーン (Sheen) (リッチモンドの旧名) にあった。当時スウィフトが書生として仕えていた准男爵サー・サリヤム・テンペルの屋敷にあらわれてゐたと述べている。

(*Corr.* III, pp. 232-3) スウィフトが同伴したと思われ、テンペルの引越の時期にこの書は Homer E. Woodbridge, *Sir William Temple: The Man and His Work* (N. Y.: MLA, 1940), p. 221 参照。

(e) T. G. Wilson, "The Mental and Physical Health of

Dean Swift," *Medical History* 2 (1958), 175-90; "Swift and the Doctors," *Medical History* 8 (1964), 199-216. Wilson はこの一領域である。

(9) *Corr.* IV, p. 210.

(10) *Journal to Stella* in Herbert Davis, et al., eds., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 16 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1939-74), XV-XVI, pp. 32-33.

(e) マーモンと記述している D. N. B.; Anita Guerini, "The Tory Newtonians: Gregory, Pitcairne, and Their Circle," *Journal of British Studies* 25 (1986), 303-4 参照。この図表はマーマンと記述している。その理由は、その合致を D. N. B. 参照してください。

(f) *PW*, VIII, p. 127.

(g) *Journal to Stella*, p. 225.

(11) Kenneth Dewhurst, *Thomas Willis' Oxford Lectures* (Oxford: Sanford, 1980), pp. 1-49; William Feindel, "Thomas Willis (1621-1675) — The Founder of Neurology," *Canadian Medical Association Journal* 87 (1962), 289-96.

(12) Sidney Young, *The Annals of the Barber-Surgeons of London* (London: 1890), pp. 563-5.

(13) William Wotton, *Reflections upon Ancient and Modern Learning* (1694; rpt. Hildesheim: Olms, 1968), p. 212.

- (14) Robert C. Steensma, *Dr. John Arbuthnot* (Twayne, 1979) ; *DLB: Restoration and Eighteenth-Century Prose Writers*, pp. 29-40.
- (15) "In Sickness", l. 10; Pat Rogers, ed., *Jonathan Swift: The Complete Poems* (Harmondsworth: Penguin, 1983), 165.
- (19) *Corr.*, III, p. 104.
- (17) 註の聲でいふに John F. Sena, *The Best-Natured Man: Sir Samuel Garth, Physician and Poet* (N. Y.: AMS, 1986), pp. 18-37; Frank H. Ellis, "The Background of the London Dispensary," *Jnl. Hist. Med.*, 20 (1965), 197-212; Sir George Clark, *A History of the Royal College of Physicians of London*, 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1966), pp. 442-7, 466-72 を參照。
- (20) Guerrini, 307-8; Philip Shorr, "Sir John Freind (1675-1728) M. D.: Pioneer Historian of Medicine," *Isis* 27 (1937), 453-74.
- (21) *PW*, XIV, p. 38.
- (22) Fleetwood, p. 48.
- (23) Owen Manning and William Bray, *The History and Antiquities of the County of Surrey*, 3 vols. (1804-14: rpt. Wakefield: E P Publishing, 1974), Vol. III, p. 310.
- (23) Fleetwood, p. 46.
- (32) Widdess, pp. 7-16.
- (32) Widdess, pp. 16-19.
- (32) Widdess, pp. 23-24, 26, 29-37 et passim.
- (32) Widdess, pp. 69-71; J. G. Simms, *William Molyneux of Dublin, 1656-1698* (Blackrock, Co. Dublin: Irish Academic Pr., 1982), passim.
- (32) 題名略して「スティーヴンズ・リーカー」。
- (32) *PW*, XV, p. 122.
- (32) スティーヴンズ・リーカーの題名でいふに T. P. C. Kirkpatrick, *The History of Dr. Steevens' Hospital, Dublin, 1720-1920* (Dublin: Dublin Univ. Pr., 1924) 參照。
- (32) *Corr.*, III, p. 141; V, p. 174.
- (32) Kirkpatrick, p. 360; *Historical Manuscripts Commission Report: Various Collections*, VIII, pp. 244, 303. 題名「スティーヴン・リーカーの記録」は「スティーヴン・リーカーの記録」の誤りである。(The Registers of St Michan, Dublin, 1636-85 (Dublin: Parish Register Society of Dublin, 1907-9))
- (32) John Dunton, *The Dublin Scuffle* (1699), p. 428.
- (32) Kirkpatrick, p. 343.
- (32) Widdess, pp. 57, 72-3, 106, 239, 242; Kirkpatrick, p. 340.
- (32) *Corr.*, III, p. 312.
- (32) 「スティーヴン・リーカー」の「スティーヴン・リーカー」の著作である。T. P. Le Fanu, "Catalogue of Dean

Swift's Library in 1715." *Proceedings of the Royal Irish Academy*, Section C (1927), 269-70, 272 参照。

- (37) 聖ペトリック病院の歴史 4 Elizabeth Malcolin, *Swift's Hospital: A History of St Patrick's Hospital, Dublin, 1746-1989* (Dublin: Gill and Macmillan, 1989) を読む。

(38) Fleetwood, p. 206.

(39) *Corr.* IV, p. 66.

(40) *Corr.* IV, pp. 296 & n. 319, 367, 405.

(41) *Corr.* IV, p. 319; cf. p. 296.

(42) *Corr.* IV, p. 367n. 3; *PW*, XIII, p. xxxvi.

(43) Louis A. Landa, "Jonathan Swift and Charity" in *Essays in Eighteenth-Century English Literature* (Princeton, N. J.: Princeton Univ. Pr., 1980), p. 53.

(44) Widdess, *RCSI*, p. 126.

(45) Malcolin, p. 316; Maurice J. Craig, ed., *The Legacy of Swift: A Bi-Centenary Record of St. Patrick's Hospital, Dublin* (Dublin: 1948), pp. 14, 42.

(46) このほかのマンリンの医師たちを挙げておく。

ヘンリー・コップ (Henry Cope) (一六八四頃—一七四三)

晩年のスウィフトの主治医のひとりである。ライデンと TCD に学び、RCP 会長を二度、軍医総監、欽定医学教授、ステイヴンズ病院管理委員および主任医師などを

勤め、Widdess, pp. 61, 77, 106-7, 239-40; Kirkpatrick, p. 340.

ジェイムズ・グラタン (James Grattan) (一六七三—一七四七)

スウィフトと親しかったグラタン七兄弟のひとり。「町の半分を殺すか治すかする」とスウィフトが評したほど開業医として成功した。TCD 出身で RCP 会員および会長としてダブリン市欽定医学教授を二十七年間勤める。コップ同様、ステイヴンズ病院管理委員および主任医師も兼任した。Widdess, pp. 77-8, 239-40; Kirkpatrick, p. 340.

ロバート・グリフィス (Robert Griffith) (一六六三—一七二〇)

ステラの友人。チェスター生れ。TCD とオクスフォードで医博 TCD 化学講師および初代ダブリン市欽定医学教授。ステイヴンズ病院設立委員会にスウィフト同様加わる。Widdess, pp. 57-8, 78, 239; Kirkpatrick, p. 360.

ウィリアム・スミス (William Smith) (生年不詳—一七三三)

ステラの医師で、『ステラへの書簡』に言及されている。(Jnl, pp. 539, 541) TCD で医博。RCP 会長に五度選出されている。Widdess, pp. 39-40, 57, 239.

(一橋大学助教授)